

自由民主党 中央政治大学院
まなびとスコラ・オープン講座
憲法に学ぶ「この国のかたち」

第2期「まなびと夜間塾」特別講座

2021年4月8日

講師：門田隆将 作家・ジャーナリスト
テーマ：「今だから分る『根本博陸軍中将』が
台湾を救った歴史的意味」

皆さん、こんにちは。門田隆将でございます。中谷さんが土佐高校の先輩ということで、講演しろという命令に従いましてやってきたわけでございますが、たった45分しかないということをおっしゃって、いや今日は質問時間なし、私の話をできるだけ多く聞いて欲しいと、先ほど条件闘争をしていたわけで、質問時間が少なくなるとは思いますけれど、申し訳ありません、最初に謝っておきます。

私、『太平洋戦争 最後の証言』シリーズをはじめ多くの戦争ノンフィクションを書いております。一番多いのは戦争ノンフィクションですが、その中で今日は根本博さんの話をさせていただきたいと思うのです。この歴史、現代と関わらないと、折角、貴重な時間を頂いてお話を聞いていただくのに皆様の興味が薄れてしまいますので、その辺も気にしながら普段よりは早口で話をさせていただきます。普段は1時間半やって足らなくて2時間ぐらいの講演をやらせてもらうのですが、できるだけ早くやりたいと思います。

この『台湾を救った陸軍中将 根本博の奇跡「この命、義に捧ぐ」』という本は今、文庫になっていますが、2009年に発売の頃は単行本ですので分厚い本でございます。何で台湾を救うことになったのか。その前段階がありまして、終戦の時に遡るわけです。

皆さん、まず、歴史を見る時に必ず自分をその場において物事を考えて欲しいと思うのです。私のノンフィクションというのは常にその場に身を置いて取材をしております。例えば、「ガダルカナルの血染めの丘の戦い」で、その生き残りの人に話を聞く場合は、その人の耳の横で私が、戦闘のピョンピョン飛んでくる弾丸をよけながら聞く感じで取材をしております。私のノンフィクションは、映画化されたりドラマ化されたりすることが多いのです。なぜかという「場面描写」だからです。私のノンフィクションは、場面を描写しているのです。その場に必ず身を置いています。

皆さんは、政治に関わっている、そして政治に関わろうとする方々は、物事を考える時に必ず「その場に身を置いて考えて」みてください。今の価値観で歴史を振り返るのではなく、その時代の感覚で、かつその現場に立って考えて欲しいわけです。いろいろ話したいことがあるのだけれど、それは全部カットしますが、それだけは言わせてもらいます。

終戦の詔勅がありました。玉音放送がありました。あそこにまず身を置いてください。あれは何ですか？ 玉音放送というのは？ その時、玉音放送って何ですか、終戦の詔勅って何ですかと聞かれたら、「いや、それは戦争が終わるということでしょと…」と、みんな言うと思います。例えば皆さんが支那派遣軍として、どこそこにいる、あるいは満州で、どこそこにいる、そういうふうに自分のいる場所を設定してみてください。

終戦の詔勅とは、簡単なことを言うと、武装解除命令、つまり「武器引渡し命令」なのです。今まで敵と戦っていたのだけれど、「ハイ、もうヤメ。武器を引き渡しなさい」という命令です。戦争が終わるということはそういうことでございます。

ここで私は「本義」という言葉を皆さんにお伝えしたい。例えば政治の世界、政治家の本義は何ですか、といたら、国民の生命、財産、領土を守ることです。これは政治家の本義であります。国民の生命、財産、そして領土を守るために、あなたはどのくらいのことをやっているのか、ということをおは常に政治家の人に聞いています。最近の政治家というのはそういうことを全く忘れて、ただ中国にひれ伏して、中国の言うことをハアハアヘエヘエと聞いているような政治家が多いのです。そのことに対して国民は非常に怒っている。けれども、国民の生命、財産、領土を守ることが本義と分かっている人は、本当に今の状況を悔しい思いで過ごしていると思います。そしてこういう勉強会が成立するのだと思います。

そうすると皆さん、「軍人の本義」を考えて欲しいのです。政治家の本義が「国民の生命、財産、領土を守る」ことだったら、軍人の本義は何ですか？ と聞かれたら、皆さん、何とお答えになりますか。ここで二手に分かれる。

何かというと、軍人の本義は「上官の命令を聞くこと」である、これを遂行することである。「突撃」という命令が出たら突撃する。日本軍というのは世界最強だったわけです。なぜかというと「突撃」という命令が出たら突撃するからです。

皆さん、突撃命令が出たら、どこの軍隊も突撃すると思っているでしょう。全然違いますよ。突撃する軍隊は逆に少ない方です。塹壕の中において銃弾の嵐の中、突撃命令が出た時に、10人のうち5人突撃する人間がいたらいい方です。大半は行きません。これは常識です。

けれども日本の軍隊は、突撃命令が出たら10人が10人、あるいは8人か9人。1人や2人は膝を抱えて怖いからと突撃しない人もいますが、その比率で言うならば、世界で圧倒的に突撃して行った軍隊が日本軍です。

これを、なぜですか？ ということになると、それだけで45分になってしまうのだけれど、簡単なことを言うと「恥の文化」です。恥を知らなさいという教育、日本人というのは、恥を知る民族です。膝を抱えて震えているということは……。太平洋戦争・大東亜戦争を戦った時に、明治生まれのお父さんお母さんに教育された人たち、恥を知らなさいという恥の教育を受けたのが日本軍。その人たちが10人のうち少なくとも8人か9人は突

撃して行ったわけです。

これをアメリカの日系442部隊（第442連隊戦闘団）で私よく説明するのですが、アメリカ陸軍史上最強の部隊と謳われ、奇跡の“テキサス大隊救出劇”をはじめ、ヨーロッパ戦線で勇名を轟かせた日系442部隊。要するに、兵たちは、お父さんお母さん、日系移民の一世に育てられた二世で、「恥を知りなさい」の教育を受けた“日本人”がアメリカの装備で戦った、あの日系442です。

この日系442が、なぜアメリカ陸軍史上、質量ともに圧倒的な数の勲章をとっているのか。これは、死傷率が三百数十%だからです。えっ、死傷率三百何十%ってどういうことですか、というと、日系442部隊ができたとき3000人。死傷者1万数千人。なぜかということ常に突撃、突撃で、どんどん人が死んでいくからです。そうすると分母が3000からスタートしているので変わらないのだけれど、補充、補充で部隊は維持されますが、死傷者はどんどん増えて1万何千人になるわけです。死傷率三百何十%というのが日系442部隊。これは何で説明できるかということ、もう「恥の文化」としか言いようがないのですけれど、ここを深入りすると時間がなくなりますので、そこをちょっと念頭に置いておいてください。

じゃ軍人の本義は何か。2つに分かれると言った。「上官の命令」、突撃という命令が出たら突撃する。日本軍は当然です。世界で一番突撃した。そうすると陛下から、戦闘をやめなさい、そして終戦の詔勅、これは戦闘停止と武器引渡し命令なわけです。天皇陛下は大元帥、最上官であります。その命令を聞くのは軍人の本義の1つとして当然。関東軍の山田乙三大将はその通り実施して、ソ連軍への武器引き渡しを速やかに行い、その結果、満州がどうなったかということは、皆さんご承知の通りであります。

そうすると満州の隣、内蒙古の方に、根本博という男がいました。

○（スライド）根本博中将の写真

根本博という人間は、福島県岩瀬郡仁井田村、今の須賀川に生まれた陸軍中将で、隣の満州の山田乙三大将とは全く違う行動に出ます。それは「武器引渡し命令拒否」です。戦闘継続です。上官の命令に従うということが軍人の本義であるならば、これは間違いですよ。しかし軍人の本義は、もう1つ重要なものがあるのではないかと。何かというと、「国民の命を守る」という、皆さん政治家と同じ本義を軍人は持っております。そっちの方を根本博は優先いたしました。陛下の命令を戦闘停止・武器引渡し命令とは、彼は受け取って

おりません。

少し詳しく話をさせてもらいます。皆さん、政治家の人もそうですが、これから政治家になる人も、政治家となつてから、いずれ生涯に一度か二度、マニュアルなき事態に遭遇します。マニュアルなき事態に遭遇する時に、10年前のあの東日本大震災で、民主党政権がマニュアルなき事態でどんな失態をしでかしたかということは、先ほど中谷さんの説明にもありましたが、「Fukushima50 (フィフティ)」という、私の『死の淵を見た男』が原作となった映画を観ていただければ分かると思います。

そうすると、マニュアルなき事態、自分で判断して自分で最善の策を執らなければいけない、そういう時が来るわけです。

根本博は、昭和20年8月14日に、「明日、玉音放送があるから張家口（ちょうかこう）放送局に集まれ」ということになります。内蒙古の彼らが一番の拠点としている張家口という所でございます。その張家口放送局へ玉音放送を聞くために幕僚以下、根本博は連れて行かないといけない。そして行った。その時にもうすでにマニュアルなき事態に突入しております。アジアに散らばっているいろいろな所で玉音放送をみな聞いているわけなのだけれど、根本博だけがやったことがあります。

幕僚を前にして玉音放送が流れてきます。途中から幕僚が泣きだします。多くの戦友、部下たちが死んでいますからね。自分たちが今までやってきたことはどういうことだったのだと、泣き始める。根本博はそれも予想しております。そこで、玉音放送が終わったら自分に内蒙古全体へ放送させなさい、その準備を張家口放送局はやっておきなさいと、玉音放送が終わったらすぐに自分が全蒙疆（もうきょう）に対して放送するということを命じておくわけです。

そして幕僚たちが泣いた。戦闘を停止して武器を引き渡して、戦争に敗れて、自分たちの運命がどうなるか分からない時にどうするかという、これは全くマニュアルなき事態。その時に根本博だけがやったことを、今からお伝えいたします。

その放送内容を私は本にも書きましたが、こういう放送。玉音放送が終わって幕僚たちが泣いている時にもう放送を始めます。根本博はこう言ったのです。

「皆さん、日本は戦争に敗れ、降伏いたしました。皆さんは今後のことを心配しているとします。しかし、わが部下、将兵たちは皆、健在であります！」

こういうふうに、まず放送しました。

「わが軍は、私の命令がない限り、勝手に武器を捨てたり、任務を放棄したりするものは

一人もおりません。心を安んじてください。疆民（きょうみん＝内蒙に住む人々）及び邦人は決して心配したり騒いだりする必要はありません。私は上司の命令と国際法規によって行動します。疆民、邦人、および我が部下等の生命は、私が身命を賭して守り抜きます。皆さんは軍の主導を信頼し、その主導に従って行動されるよう強く切望するものであります。」

皆さん、こういう放送が、玉音放送が終わった途端に軍司令官から流れてきたのです。これを皆さんその場に身を置いて考えてみてください。

日本軍というのは、簡単に言うと“驕った軍隊”です。どの点で、たとえば、敗けを想定していない。日清・日露とも勝っているし、蒙古軍の時も神風が吹いて勝っている。要するに、敗けたことのない日本。そのために陸士（陸軍士官学校）、陸大（陸軍大学校）、そして海兵（海軍兵学校）、海大（海軍大学校）に行っても、「敗けた時にどうするか」という教育をされていない。つまり自分たちが敗けるということを想定していない。これ、驕ってますよね。そのため、敗けた時にどうするかというのは、それぞれの軍司令官に委ねられたわけです。

その前日に、張家口放送局へ玉音放送を聞くために集まれという時に、根本博は、まずパニックを防がなければならないと考えたわけです。パニックを防ぐためには、この戦争に敗けたとって軍が敗走したり、あるいは邦人の保護をしなかったり、そういう不安に駆られたら外地にいる邦人は一体どうなるかということをも根本博は考えております。

そこで本義ですが、上官の命令に従うのも本義、しかしそれよりも、もっと大きな本義がある。皆さんと同じ。国民の生命、財産、領土を守る。この中で言うと国民の命を守るということでもあります。たとえ戦争に敗れても、国民の生命——この時に張家口だけで2万人の邦人がいて、内モンゴ全体には2万人いて、計4万人の邦人がいたのです。この4万人の邦人の命を守り抜くというのが私たちの本義であるということ、ものすごいことが起こります。何かというと…。

皆さんは、ソ連軍が殺到して侵入したのは満州だと思っている。違う。満州だけでなく内モンゴにも殺到している。では、なぜ皆さん、知らないのか。撃退したからです。根本博以下駐蒙軍はソ連軍を撃退したのです。その戦いが戦後8月15日以降も続くのです。4万人の邦人を北京にまで無事に戻すまで戦い続けたのです。それが満州にしかソ連軍は侵攻していないだろうと皆さん思っている理由です。撃退したから被害は出ていない。しかし、それがもの凄いなのです。その戦いの凄さは、命令から来ているのです。先ほど

全蒙疆への放送を言いましたが、取って返して駐蒙軍の司令部に戻った根本博は何をやったか。全軍に、ある命令を発している。

放送を終えて根本さんが司令部に戻って来た、そこから絶対命令を下します。これが、その内容です。

「全軍は別命あるまで依然その任務を続行すべし。もし命令に依らず勝手に任務を放棄したり守備地を離れたり、あるいは武装解除の要求を承諾した者は軍律によって嚴重に処断する」

これを全軍に発しております。駐蒙軍だけは終戦後も戦い続けることになった。8月9日から激しい戦闘をずっとやっているわけです。

ソ連軍の何が凄いかというと、やはり戦車隊です。ヨーロッパ戦線でも、この戦車隊が威力を発揮しますが、こっちの方もそうです。ノモンハンでも日本軍は、この戦車に大変な苦戦を強いられているのですが、駐蒙軍は戦車壕を延々と掘っている。あの原野の中でも山岳地帯になってくると戦車の通れる所が狭くなる場所があります。そこに戦車壕をずっと掘っている。幅8m・深さ6mの戦車壕を延々と掘り続けたのが駐蒙軍です。そこに「丸一陣地」というのを作りました。山岳地帯の戦車が通れる所に、結構、幅はあるのです、戦車壕を掘って、迎え撃つ丸一陣地を構築したわけです。そこをソ連軍は突破できない。激しい戦闘が、もちろん8月9日から始まっているのですけれど、8月15、16、17日、延々と続くわけでございます。

そこで、なぜ駐蒙軍だけが戦争をしているのだ？ ということに当然なります。国際法規に違反している。国自体がもう戦争は止めているのに、なぜ駐蒙軍だけ戦っているのかと、大問題になっていきます。こういうとき一番困るのは軍の上層部が邦人を守るためにきちんと動いてくれないことなのです。なぜか？ 支那派遣軍総司令部が南京にあります。その時の総司令官は岡村寧次さんで、岡村大将から根本中将に命令が来ます。武装解除をしろという電報がどんどん来るのです。その原文がありますので、それを皆さんにお伝えします。

「蒙疆方面におけるソ軍の不法行為に対し、貴軍の苦衷、察するに余りあり」

あなたたち頑張っていることは察するに余りあると言っているのですが、

「然れども、勅令を呈し、大命を奉じ、真に耐え難きを耐え、忍び難きを忍ぶの秋（とき）なるを以て、本職は大命に基づき、」 大命というのは玉音放送、終戦の詔勅です。

「血涙を飲んで、あらゆる手段を講じ、速やかに我より戦闘を停止し、局地停戦交渉及び

武器引き渡し等実施すべきを厳命する。」

早く武器引き渡しをしろという厳命が来るわけです。皆さん、防衛研究所に行ったら、この緊迫のやりとりが出ていますから、原文を見てください。私、見ましたけど、震えますよ。お互い軍人同士、大将と中将が、邦人の命をどうするかで、やり合っているのです。

そのうちの根本の返信を紹介します。

「今、張家口には2万の日本人あり。外蒙ソ軍は延安と気脈を通じ、重慶軍に先立って張家口に集結し、その地歩を確立せんがため相当の恐怖政策を実施せんとしあるがごとし」

延安は毛沢東軍、重慶軍は蔣介石軍のことです。共産軍と気脈を通じた外蒙軍とソ連軍によって、恐怖政治が行われる危険性を告げています。そして重要なのは次です。

「日本人の生命、財産を保護すべきも、もし延安軍または外蒙ソ軍等に渡すならば、その約束は守る能わずと申しあり」

外蒙ソ軍に武器を引き渡せば、邦人の生命、財産が守れなくなる。よって武器引き渡し命令を拒絶するという電報です。

皆さん、これ本当に原文を見てください。感動すると思いますよ。邦人の命をなんとしても守り抜くという「軍人の本義」への思いが逆（ほとぼし）った電報です。覚悟の返電です。

8月17日に、撃退されてばかりのソ連軍が、ついに張家口に飛行機からビラを撒きます。そして軍使が丸一陣地にやってきて、ビラと同じ内容ですが、こういう口上を述べていきました。

「日本は、すでに無条件降伏し、関東軍もまた、日本天皇の命令に服従して降伏した。だが、張家口方面の日本指揮官だけが日本天皇の命令に服従せず、戦闘を続けているのは誠に不思議である。直ちに降伏せよ。降伏しないならば、指揮官は戦争犯罪人として死刑に処する」

これが8月17日の夕方に撒かれ、そして軍使が丸一陣地にやってきて述べたことをご紹介します。

皆さん、その場に身を置いてください。皆さんがもし駐蒙軍の幕僚だった場合に、どうしますか。向こうは根本博を死刑にしていると言っている。けれども、4万人の邦人の退却が終わっていない。屋根もない「無蓋列車」にどんどん詰め込んで北京の方に向けて邦人を送っているのだけれど、まだ続いている。終わりが見えない戦いをやっているのです。幕僚である皆さんは、どうしますか。

幕僚に動揺が走ったのです。終わりがわからない。一体、いつまでやるのだ。天皇は戦争に敗けたと世界に宣言している。武器引き渡し命令は、支那派遣軍総司令官と東京、両方から来ている。動揺するのは当たり前です。

その時に幕僚会議が開かれた。この幕僚会議も、私は描写をするのに、いろいろな資料を当たったら、出てきました。幕僚が幕僚室で両方へ向かい合わせに座って、もう侃々諤々、ほぼ半数・半数だったそうです。ソ連軍への抵抗をこのまま続けるというのと、ここまで頑張ったのだからもういいではないか、ソ連軍が暴行その他で邦人を殺戮するとは限らないではないかという、この2つの意見が激突して決まらないわけです。

皆さん、その時に、何で根本中將は、こういう戦いをやっているかというのと、ソ連軍が婦女子にどんなことをするか、武装解除し、手を上げた人間に対して何をするか、根本本は熟知していたからです。彼は中佐時代に参謀本部で支那班の班長をやっているのですが、隣は陸士23期で同期の橋本欣五郎がロシア班長でした。2人でいつも、ソ連軍はどうか、中国の軍隊はどうか、ずっと検討していたから、必ずソ連軍は婦女暴行その他、日本人の命が大変なことになるということがわかっていた。だから戦い抜いているわけです。

幕僚会議で侃々諤々になって決まらないので、司令官に判断を仰ごうということになります。それで司令官室に、

「司令官、幕僚室の方に来ていただけないでしょうか。」

ということで、やって来た。その時の幕僚たちの回想がすごいのです。この巨体で根本中將がやって来て、ソ連に武器引き渡しをするかどうかで意見が真っ二つになった時に言った言葉、いろいろな回想録に載っているのを重ね合わせて、私はこの本に描写しました。

「諸君、私を戦犯にすると言うが如きは児戯に類することである」

児戯というのは、“こどもの戯れ”のことです。

「ソ連は私を戦犯にすることだが、私が戦死したらもはや戦犯にしようとしても不可能ではないか。もし、諸君の中に戦闘継続に対して躊躇する者あらば、私自身が丸一陣地に赴きソ連軍軍師を追い返す。もし不可能ならば私自身が戦車に体当たりして、死ぬまでのことだ。今から丸一陣地に行く！」

と、部屋から出て行こうとしたのですよ、皆さん。それで皆がバツと、この巨体の根本中將に飛びつき、皆で「私が行きますから！」ということで、やっとなんとどめたのです。

国民の命を守ることであるという軍人の本義が一度も揺らいだことがない。ミャンマーでは国民に向かって撃っている軍隊がありますよ、皆さん。人民解放軍だってそうですよ。

しかし日本軍、この根本博中将は国民の命を守ることが軍人の本義である、武器引き渡し命令はその先にあるのだと。陛下の命令に私は逆らっているわけではないということで、内蒙古の4万人の邦人は守られるわけです。

日本の戦後教育というものは日本軍の真実の歴史を全く教えていない。私は『太平洋戦争 最後の証言』シリーズをはじめ、多くの元軍人に証言を聞いて、いろいろな本を書きましたが、全く戦後教育を受けてきた私には驚きの連続でした。これもそうです。昔の日本人はやはり毅然としているのです。今のように、中国の属国になったような態度は取りませんよ。情けないですよ、今の日本の政治状況を見ると。恥ずかしいですよ、こういう人たちに対して。まあ、それはそれとして話を続けます。

それで、皆さん、一番すごいのは8月20日の戦い。ついに8月20日、向こうは闇に紛れて丸一陣地に夜襲をかけてきて、朝方まで続く激しい戦いになります。いきなりヌツと大柄のロシア兵たちが目の前に現われたそうです。この戦いの生き残りが1人だけ山形にいて、私が取材した2年後に亡くなりましたけれど、渡辺義三郎さんという、のちに山形の剣道の指導者にもなる人なのだけれど、この人に話を聞いて、へえー、と思いました。

皆さん、夜襲で戦う時はどのようなものかと、“斬り合い・突き合い”ですよ。私は、びっくりしました。いきなり闇の中で、しかも陣地の中で戦っていますから、ババババツと撃つと味方に当たるでしょう。だから突き合い、斬り合いなのです。戦国時代の戦さみたいなものです。そうすると、ソ連軍の銃剣が日本軍の銃剣より10cm以上長かったそうです。かなり苦戦したけれども、日本軍は身体が小さくとも気迫はあるし、銃剣が短くても負けないわけです。渡辺さんも斬って斬って斬りまくったそうです、というより、突いて突いて突きまくったそうです。彼は日本刀を持っていて、日本刀で戦ったそうです。「撃つたら味方が死ぬじゃないか。撃てないよ！」と言っていました。もう戦国時代ですよ。そうやって押し返したのです。

邦人の命がこうして守られたのです。8月20日の戦闘の後、ものすごい霧が張家口一帯に立ち込めて、そこで最後の無蓋列車が出るのです。4万人の最後の無蓋列車が北京に向かったとき、撤退命令が出るのです。

ちょっと時間オーバーさせてもらって、話を続けさせてもらいますけど、この時に、皆さん戦争に詳しいと思うので、8月15日に阿南（惟幾）陸相が責任を取って腹を切る場面、皆さんも知っていると思います。阿南陸相が腹を切ったために、陸軍大臣の地位が空白になってしまったのです。これは大変なのです。戦争が終わって、陸軍大臣の仕事はも

のすごくあるのですから。「一死、大罪を謝す」と阿南陸相が腹を切って死んでしまったことで大変なことが起こった。

次の陸軍大臣に指名されたのが、北支那方面軍司令官の下村定（しもむらさだむ）陸軍大将。これで北支那方面軍の司令官が東京に飛ばなければいけなくなった。そうすると、北支那方面軍には配下に35万人いますから、これも司令官がいなくなるというのは大変なことです。どうなったかという、内蒙古の駐蒙軍を率いている根本中將に「北支那方面軍司令官を兼務せよ」という命令が出た。それであの戦いの最中に、とにかく引き継ぎをしろということで、根本博を引き剥がして北京に来させて引き継ぎをすることになる。急遽、張家口郊外から飛行機で北京に飛ぶのです。これは多分、根本が戦い続けているから、引き剥がす意味もあったと思うのですが、とにかく下村定との引継ぎのために北京へ行く。部下たちはそのまま戦い続けている。そこでちょっと感動の話があるので、皆さんにお伝えしておきます。それは何かというと。

北支那方面軍司令官として根本が北京に来た。心はしかし、内蒙でのソ連軍との戦いにあります。35万の将兵をいろいろしながら、心はむこう。そうすると最後の無蓋列車が出る。そこへ引き揚げ命令、戦闘はもうそこまでに引き上げて来いという。けれども、むこうから追って来られると、これはどの戦いでもそうなのだけど、戦いが終わって、去っていく時ぐらい、しんどいことありません。後からいろいろな者が追ってきますから。そうすると戦闘、戦闘の連続で、北京まで来るのに、1週間以上かかるわけなのですが、そのうちに無線が戦闘でやられてしまって連絡がつかなくなる。連絡がつかなくなったところで、もう全滅したのではないか、ということになります。

連絡がなくなって3日、4日、5日と経っていく。これはもう全滅だろうということで、根本中將は、松永留雄少將（参謀長）という自分の部下に、とにかくどうなっているのか、お前、調査せよ、と。

もう時間ですか？ 皆さん、まだとば口ですから。そもそもまだ台湾に行っていないから。今日は質問時間ナシです（笑）。

皆さん、それでどうなったかという、とにかく松永留雄少將が八達嶺の万里の長城の所から、蒙疆方面、内蒙古の方へ向かって行こうとする。そうするとしばらく経って、白い馬に乗った将校が向こうからやって来た。おっ……。遠くから見えていたら、あれは内蒙古の俺たちの部下じゃないか、将校じゃないかということで、だんだん近づいて、「おまえ1人か！ 部下たちはどうした！ 生きているのか？ 死んでいるのか？」という、その将

校は意識を失ったまま、馬に乗っているだけで何も答えられない。要するに意識朦朧で、答えられない状態だったそうです。

それで松永留雄少将は絶望に陥るのですが、するとその後、遙か向こうに豆粒みたいな人が見えてきたそうです。時間が経ってみたら、だんだん増えてきた。内蒙古の自分たちの軍隊が、ケガ人を担いで、戸板に乗せた奴もいる。そういう駐蒙軍がやって来て、「あーっ、生きていた！」ということで、松永さんはものすごく感激する。その松永留雄が、厚生省援護局の要請によって回想録を書いている、その原文を読み上げます。

「敵を阻止し、降伏を抗ぜざりし根本心情は、根本軍司令官がソ連の不信暴虐を判断せる結果を出発点とせり。邦人の保護は軍の任務なるが、張家口宣化地区のみにてその数2万内外。これを完全撤退するは容易の業(わざ)にあらず。支那派遣軍総司令官岡村大將は、降参してソ軍の要求に従うべき旨、命令するところあり。頼むべき傳(ふ)軍の到着は到底胸算すべくもあらず。」

これ、すごい。傳作義(ふさくぎ)軍が来るのを待っていたことがわかります。敵軍といえどもレイプや残虐な行為をしないという司令官を全部、分析している。傳作義という男は人格的にもやらないであろう。傳作義軍が来たら武器引き渡しをしようと考えていたということがわかります。

「軍は万事休すと長嘆息を成せり。行動中の軍の無線連絡は全く用を弁せず。後衛に限らず、第118師団と軍の間及び北京方面軍司令官と軍との間さえ連絡途絶し、状況は一切不明なりき」

で、さっきの場面になります。

「先行し来たれる乗馬将校に路上にて遭遇し、これに後衛の状況を尋ねたるが返答なく、要領を得ず。長期の退陣に引き続く退却のため、該将校は心身ともに朦朧状態にありたるなり」

と書いている。そして先程の、

「暫くの後、後衛整齊たる縦隊を以て駐蒙軍帰着す。士氣旺盛なるも、長き頭髪と髯とは無言に長期の労苦を示す。小官(感極まり)ただ落涙あるのみにして、慰謝の辞を述ぶる能わず。」

と書いている。これは私が生き残りの渡辺義三郎さんに聞いた話と全く一致しております。

八達嶺が見えてきた、北京の入口が見えてきた時に、戸板に載せて来た負傷兵はみな両

脇から抱えて、服装も全部整えた上で、掛け声をかけて、ザッ、ザッ、ザッ、と入って行ったと渡辺さんは証言していました。日本軍は恥を晒さない。先程から私、恥を知る日本人と言っておりますが、日本軍は恥を嫌いますから、弱いところ、あるいはぼろぼろの姿を見せない。しかし、目の前に来たとき、伸びた頭髪・髭を見て、「無言に長期の労苦を示す。小官ただ落涙あるのみにして、慰謝の辞を述ぶる能わず」ということで、この回想録が締められています。

皆さん、こうして日本軍は邦人の命を守った、本義を守ったわけです。そこで、皆さん、やっと、とば口が終わったので、駆け足で本論に行きます。

この中で「恩義」が発生します。何の恩義が発生するかというと、蒋介石に対する恩義です。何かとうい、この人たち（日本軍人）、そして邦人たち、みんな北京に帰って来た。この人たちを保護したのが国府軍・蒋介石軍です。そして翌年、昭和21年8月までに全員、北支那方面軍35万、そして在留邦人たちも合わせ、何十万もの人間を日本に帰したのが、蒋介石でございます。「徳を以て怨みに報ず」という、あの「以德報怨」がこれでございます。この時に恩義が発生した。根本中將はこの恩義を忘れなかった。隣の満洲の関東軍は早々に武器引き渡しを実施しましたが、シベリア送りですからね。蒋介石とスターリンはやり方が全く異なったわけです。

関東軍が武装解除しソ連軍に引き渡した武器弾薬はまるまる共産軍・八路軍の手に渡りました。それをきっかけに国共内戦は「逆転する」わけでございます。昭和23年11月から、淮海戦役、日本でいう“関ヶ原の合戦”があるのですけれど、国民党軍90万、共産軍60万、合わせて150万がぶつかる戦いで、60万の共産軍が勝って、そして決着する。

気迫が阻喪したら戦争になりません。気迫とは、敗けてたまるか！ 国民の命を守るぞ！ 家族の命を守るぞ！ それがないければ、一度決着したら、もう勝負にならない。あとはハエを駆逐するようなものです。上海も“無血開城”され、ずっと敗走して行く国府軍があるわけです。

その時に根本中將は何をしたか。もう町田に引っ込んで、ただの初老の男です。この根本さんが「ついに恩義を返す時が来た」と思ったのです。ただの初老の男ですよ、皆さん。町田に暮らしている1人の元陸軍中將が、ついに恩義を返す時が来た、と。かつては北支那方面軍司令官に最後なって35万人を率いたかもしれないけれど、今は1人の部下もい

ないのに、あなた、どうするの？ ということになります。

しかし、根本博が行けば形勢は逆転するかもしれない、ということで。これは、皆さんちょっと理解できないと思うけれど、簡単に言うと、ブラジルのサッカーと中国のサッカーを比べてもらおうとわかりやすいと思います。ブラジルのサッカーチーム、あるいは指導者が来たら、中国のサッカーチーム、それに指導者とレベルがまったく違うわけです。

戦にしても日本の軍人と国府軍の軍人のレベルはまったく違うわけ。根本中將は、何とかして国民党軍を助けるために、俺が行くということになり、密航するのです。26トンのポンポン船で。川を走っているポンポン船ですよ。ここはあまり古い人いないから……。昔は、焼玉船（やきだません）といって、ポンポンポンとシリンダーの中で焼玉が弾かれて走るこの船は、みんなに馴染みがあったわけです。昭和30年代、大きな川はよく行っていましたよ。根本さんは、あれで東シナ海を渡ったのですよ。着いたのが奇跡。

2度の座礁を経て、餓死する寸前で基隆に辿り着いて、密航者だから（留置所に）放り込まれる。髭ぼうぼうになって、連れてくる通訳・吉村是二さんが「いや、これは根本中將といって台湾を助けに来たのだから、何とか蒋介石に取り次いでくれ」と。しかし、「あんた、アホか…」ということで、誰も蒋介石に取り次いでくれない。

しかし、時間が経つにつれて、放り込まれている基隆（キールン）から台北へ、段々、噂が伝わっていく。ヘンなおっさんがいる、日本軍の元中將だけれども恩を返すために（台湾を）助けに来たと言っている、と。1週間ぐらい経って噂が台北に伝わってきて、とうとう鈕先銘（にゅうせんめい）という台湾警備司令部司令の耳に入った。

陸士を出ている鈕先銘が「それは、誰だと言っているのだ？」「根本博と言っています」その瞬間に跳び上がったそうです。鈕先銘は、根本が北支那方面軍司令官として終戦の交渉をする時、卓越した日本語を生かして国府側の交渉の中心を担った人。もちろん、根本博の人柄もよく知っている。「根本將軍が来てくれた」とすぐわかったそうです。

「本当に根本博と言っているのだな？」

「そうです！」

そのまま夜中、車を飛ばして基隆に向かう。

吉村通訳と根本さんは獄中で、まさか密航ぐらいで処刑されたりしないよな、みたいな話をしていたわけです。1週間ぐらい（留置所に）放り込まれているわけですからね。そうしたら突然出されて、風呂に入れ、髭を剃れ、と。いやこれ、やばくないか？ 処刑とちがうか、と。お風呂に入って髭を剃って、上のいい部屋に通されて、そこに高級の中華料

理が運ばれてくるわけです。なんだ、これは？死ぬ前に食べさせるご馳走ということなのか、みたいな。

2人で食べていたら、吉村さんの回想にあるのですが、ドアをバーン！と開けて、鈕先銘が入って来て、根本中將のところへパーッと行ったそうです。根本中將の手を握って「根本先生！根本先生！」と言ったまま、それ以外、何も言えなかったそうです。ただ涙を流していたそうです。これは軍人同士というか、根本中將が助けに来てくれた、一緒に死んできてくれた、それでもうダーッと涙。吉村さんの息子さんが大阪の人で、もう80過ぎましたけど、いまだに「あのとき、ただ涙、涙で、言葉が“根本先生”以外になかった」と父親（是二さん）が亡くなるまで言っていたことを語っておられます。

そして蒋介石と会えることになり、林保源（りんほげん）という名前をもらって、湯恩伯（とうおんぱく）将軍の下で金門島の戦いに挑むわけなのですが、ここで時間が来てしまうということがありまして、根本中將の話ですが、そこでどうなったかというのを簡単に言いますと、皆さん、金門島に、共産軍のジャンク船、木造船で1回におよそ2万人を運べるのですが、その2万人を金門島に上陸させて、ジャンク船を帰さない、焼き尽くすという戦略を取ります。そのために、金門島の彼らが上陸できる浜はここだけ、その洞窟、そして穴を掘って油を全部隠し、全て上陸させた後、これを焼き尽くすという作戦を取るわけです。

皆さん、先程、ブラジルサッカーと中国サッカー、特に両者の指導者の「力」が全然レベルが違うと言いましたけれど、根本中將が作戦立案すると、とにかくそのジャンク船が大陸に戻ったら大陸までの距離は2キロですから、1回戻ったらまた2万、つまり4万、6万、8万、10万と兵がやって来て、勝ち目がなくなるわけです。けれども、2万だけ金門島に入れ込んで、ジャンク船を焼き払って、これを殲滅（せんめつ）すれば勝てるということで、金門の古寧頭戦役（こねいとうせんえき）と呼ばれる昭和24年10月の戦いに根本中將がこの作戦を建策して、勝利するわけです。

ちょっと時間オーバーですが、話をもうちょっとさせて欲しいのです。ここで私は黄ばんだ新聞を出したいのです（台湾の新聞を掲げる）。

台湾は本省人と外省人、いわゆる元々の台湾人と、蒋介石と一緒にやってきた外省人とは全く意識が違います。皆さんは台湾でいろいろな意見が出ている時に、この人は外省人の意見を代表して言っているのか、本省人いわゆる台湾人の意見を言っているのか、よく気を付けて判断してください。

私がこの本を書いた時は馬英九政権でございましたが、国民党・外省人が力を持っていて、特に国防部は完全に外省人のものでした。私が国防部を取材すると「根本博などは存在していない」という非常に恐ろしい回答でございました。私は怒りました。というのは全部取材して、根本博がどんなことをやったか分かった上で行っていますから。存在自体を完全否定したのには怒りましたね。これ、なぜか分かりますか？

皆さん、外省人は“ユダヤの放浪の民”と同じです。何かというと、なぜ台湾は、あの二・二八事件をはじめとして、白色テロの時代、そういうのを含めて、高圧的な政治をずっと38年間も戒厳令を布いて、ああいうふうに言論の自由も全部押し潰してやってこれたのか。なぜ国民党、外省人にそんなことが許されるのですか。彼らがなぜ台湾を支配しているのですか。

もとを考えてみたら、「共産化を防いだ」ということしかないわけですよ。共産化を防いだから、要するに八路軍を金門島で止めたから、ここ（台湾）を支配していいのだということで、彼らの支配の根拠はそこですよ。そうでなければ、彼らは台湾から出て放浪の民にならなければならないわけです。

もし、その唯一の根拠が日本人によって成し遂げられたとものだと分かったら、どうなりますか？ これは絶対に隠したいわけです。根本中將の存在自身を消していただきたいわけですよ。古寧頭戦役の記念館に行っても、根本のネの字もありませんよ。これは李良榮（りりょうえい）将軍と胡璉（これん）将軍がやったものだと、そればかり書いています。私が国防部を取材した時も、全部の取材の最後に行っているのに、「そんなものは存在しない」と。皆さんが行っても腹立つと思いますよ。腹立つでしょう？ それで、私は腹が立ったわけでございます。

それでどうしたかということ、台湾で幕僚会議を私も開きまして、どうしたらいいかということで、台湾人の友達も多いから、いろいろ話し合いました。そこで「マスコミを使ったらどうか」と私が言ったら、「それはいい」ということになりました。それで社長か、編集局長だったかが知り合いだ、という台湾人の仲間がいて、それでその人に中国時報に連れていってもらったのです。それがこれ（新聞記事）です。当時、聯合報よりも自由時報よりも部数が一番多かった中国時報、これは、外省人系が一番読む新聞なのだけれど、ここに私自身の記事を書いてもらおう、と。

“門田隆将という日本の作家が古寧頭戦役を調べるために人を探している”と（見出しがあり）、門田隆将はこう言っている。この面は私の記事だけです。あとは広告しかありませ

ん。台湾最大の部数の中国時報、当時ナンバー・ワンの部数を誇っていた中国時報が、この面で私のことだけ記事にしました。(写真) これ私、これ根本博、これ蒋介石。

根本博が台湾を守った。このとき古寧頭（戦役）で根本博（林保源）と一緒に戦った人は名乗り出てくれという記事です。この反響が凄かったですよ。俺も戦った、俺も戦った、と次々、老兵たちが名乗り出てくれました。「最初来たとき根本將軍は軍服でなかった。背広で来た」「途中から軍服になった」「彼は水餃子が大好きだった」「酒も大好きだった」とか、そんな話がぼんぼん出てきた。それで国防部の言うことは嘘であると判明した。

古寧頭戦役60周年の記念のイベントがある時に、通訳の吉村さんの息子さん、ご遺族ですが、根本中將を台湾に送り出すため一生懸命にやった明石元長さん（実業家・政治家・華族）の息子の明石元紹さん、彼らを連れて私は式典に参加するというので金門島に行っただけです。私は執念深いですから、最後まで追い詰めます。金門島の空港に私たちが降り立ったら、「門田隆將先生でございましょうか?」「いや、先生じゃないけど、私です」と言ったところ、「こちらへどうぞ」「何ですか?」それで、貴賓室みたいなところに案内され、バツと開けたら記者たちがいっぱいいる。なんだ、これ? それで「こちらへどうぞ」と、吉村さんと明石さんと私がステージみたいのところへ行かされた。国防部常務次長の黄さんという中將がいて、こんな本が出来ていて、緊急の。

「根本中將は、私たちが危急存亡の時、命を懸けて日本からやって来てくれました。台湾には、雪の中に炭を送る=困っている人を助ける“雪中送炭”という言葉がございます。根本中將は、私たちのためにそれをやってくれたのであります。ありがとうございました」

ババハバツとフラッシュがたかれました。えっ!? 存在を否定していた国防部が、いきなり認めただころか、マスコミの前でこれをやったのです。

皆さん、根本博でYouTube検索したら、この模様が出てきますよ。私、その時フジテレビも連れて行っているのです。何で連れて行ったかという、国防部に圧力をかけるためです。私に対して嘘を言うことは、本になる、テレビ局もやる、それでも嘘をつくというならば、どうぞ、嘘をついてくださいということで、圧力をかけるためにテレビ局を連れて行ったのです。そうしたら逆に彼らのそういう潔いところがテレビに映ることになりましたけれど、そういうことでございます。

皆さん、時間が来てしまったので、まとめさせていただきたいのですが、要するに台湾が今あるのは、日本人のおかげです。台湾の人々の日本人に対する思いは、ものすごく強い。日本が台湾の自由と民主主義と一緒に、どう守ってくれるか。日本人の毅然とした態

度を待っております。

昭和47年に、日本は失敗いたしました。日華平和条約を、周恩来が言ってきた日中国交回復3原則に乗って自民党はあのか、後ろ足で砂をかけるように、これを廃棄いたしました。けれども、その後、ずっと国民党の支配の中で本省人たちが頑張って、頑張って、ついに李登輝総統の「静かなる革命」によって、90年代のなかばに本当の民主化を成し遂げました。この人たちが国際社会に助けを求めているのです。

その時に私、いつも言うのですが、アジア版のNATO。

○ NATO 2030 (スライド)

このアジア版NATOを作るべく何で憲法改正しないのですか。日本人よりNATOの方が危機感を持っていますよ。今後10年の方針を書いている「NATO 2030」で、対ロシアより中国の方に、ものすごい力を入れている。そしてクアッド(日米豪印戦略対話)を拡大し、日本が集団的自衛権を持って、この「抑止力によって平和を守る」ということを、多くの自民党の人はその本義に基づいて思っていると思います。けれども、それができない。野党のペースそのままに認めてしまって、3分の2の議席をあげたって何の意味もないではないか、と本当に怒っております。

公明党なんか、昭和43年の池田大作会長の第11回学生部総会での中国国交回復の提言以来、中国と一体化した政党です。昭和43年9月8日、第11回学生部総会、ここで池田大作会長がぶち上げたものを皆さん、もう一度、勉強してください。外国人土地規制、なぜあれほど骨抜きにされるのですか。都市部でなぜ事前届け出制がいけないのですか。横須賀なんか隣の土地を中国にとっくに買われていますよ。何でそんなことを皆さん許すのですか。

けれども、こういうのを勉強している人たちは、もちろん一生懸命に頑張ってくれていることは分かります。私は去年この『疫病2020』で(自著を掲げる)、自民党内部の戦いも描かせてもらいました。安倍政権の批判もかなりやりました。この自民党本部の上の901号室で、中国人の入国禁止をどのくらい皆さんが頑張って実現しようとしたかも知っております。それも全部描写しています。日本を守るために自民党の人たちが一所懸命に頑張っていることはよく知っている。しかし上層部が、その意見に耳を傾けない。けれども、あきらめてはいけません。私たちは皆さんを応援している。本義を忘れない人たちを私たちは応援しております。何とかして憲法改正を実現してください。

○憲法九条（スライド）

これ、「憲法九条」の門田私案。自衛隊の合憲化と集団的自衛権の抑止力によって、中国の「力による現状変更」をさせない。そのために集団的自衛権を持つ。その2つで私、これを考えております。もう何年もテレビでも何度も言っています。

「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求する。わが国は、国際平和の維持と国民の生命・財産および領土を守るために自衛隊を保有し、いかなる国の侵略も干渉も許さず、永久に独立を保持する。」

これ、ぜひ実現していただきたいと思います。

オーバーしてすみません。

今日はどうもありがとうございました。

（この回おわり）